

# 学位論文要旨

## 批評する力を育成する小説学習指導論の研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期

文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

中野登志美

# 批評する力を育成する小説学習指導論の研究

## 目次

### 序章 研究の目的と方法

- 第1節 研究の目的
- 第2節 研究の方法

### 第1章 読むことの教育における批評概念の史的検討

- 第1節 国語科教育における学習者の批評する力について
  - 第1項 批評する力とは何か
  - 第2項 国語科教育における批評する力の育成の意義
- 第2節 アメリカ国語教育における **critical thinking** (批判的思考) の定着過程
  - 第1項 アメリカの国語教育の批判的思考に関する論考の考察
  - 第2項 日本の国語教育における批評概念の礎
- 第3節 読みの教育における批評概念の検討
  - 第1項 垣内松三・石山脩平の解釈学理論の考察
  - 第2項 西尾実による読む作用の体系化
  - 第3項 東京都教組荒川教研国語部会の「批判読み」の理論と実践
  - 第4項 児童言語研究会の「一読総合法」の原理と方法
- 第4節 学習指導要領における小説の読み方の推移
  - 第1項 小学校学習指導要領における小説の読み方の史の変遷
  - 第2項 中学校学習指導要領における小説の読み方の史の変遷
  - 第3項 高等学校学習指導要領における小説の読み方の史の変遷
  - 第4項 2008年告示の中学校学習指導要領及び2009年告示の高等学校学習指導要領で求められている批評する力
- 第5節 PISA型読解力におけるクリティカル・リーディングの検討
  - 第1項 PISA型読解力におけるクリティカル・リーディングの分析
  - 第2項 PISA型読解力におけるクリティカル・リーディングの課題
  - 第3項 『教育科学国語教育』に収録された諸論考における批評概念の史的検討
  - 第4項 小説学習の有用性について

### 第2章 批評する力を育成する小説教材（小学校・中学校）の検討

- 第1節 小説の学習によって育成される批評する力の検討

- 第1項 田中実の説く小説の力
- 第2項 丹藤博文の小説における批評概念の定義
- 第3項 小説教材の学習指導の意義
- 第2節 宮本輝「手紙」の教材研究
  - 第1項 小説教材としての宮本輝「手紙」
  - 第2項 宮本文学の原質－『螢川』と『錦繡』に通底する主題を通して－
  - 第3項 「手紙」の作品構造
  - 第4項 「手紙」の教材的価値の検討
- 第3節 宮澤賢治「オツベルと象」の教材研究
  - 第1項 「オツベルと象」の作品構造
  - 第2項 「オツベルと象」の言葉の二重性をめぐって
  - 第3項 「オツベルと象」の結語の一行をめぐる解釈
  - 第4項 「オツベルと象」の教材的価値の検討
- 第4節 田口ランディ「クリスマスの仕事」の教材研究
  - 第1項 「クリスマスの仕事」の初読の感想文と問題の所在
  - 第2項 文学作品の基本構造から読む「クリスマスの仕事」
  - 第3項 砂丘で演奏した時の「僕」の心境
  - 第4項 「僕」の心境の変化－セントマリア病院で演奏をした時の「僕」－
  - 第5項 「クリスマスの仕事」の教材的価値の検討

### 第3章 批評する力を育成する小説教材（高等学校）の検討

- 第1節 村上春樹「青が消える」の教材研究
  - 第1項 村上春樹文学における「青が消える」の位置づけ
  - 第2項 「青が消える」における「僕」の語りの特徴
  - 第3項 コミットメントとデタッチメントの間にいる「僕」
  - 第4項 「青が消える」に内在する批評性
  - 第5項 「青が消える」の教材的価値の検討
- 第2節 山田詠美「ひよこの眼」の教材研究
  - 第1項 「ひよこの眼」の語りの構造
  - 第2項 「ひよこの眼」における「私」の語りの内実
  - 第3項 二重の批評性を内包している「私」の語り
  - 第4項 「ひよこの眼」の教材的価値の検討
- 第3節 江戸川乱歩「押し絵と旅する男」の教材研究
  - 第1項 「押し絵と旅する男」の学習者の初読の感想文の分析
  - 第2項 読者に信憑性を問うている「押し絵と旅する男」の語りの構造
  - 第3項 「押し絵と旅する男」の特性
    - －遠眼鏡及び凌雲閣の視覚的装置とリアルな描写－
  - 第4項 「押し絵と旅する男」における蜃気楼の作用
  - 第5項 「押し絵と旅する男」の教材的価値の検討
- 第4節 批評する力を育成するための小説教材の検討の総括

## 第4章 批評する力の育成を目指した従来の小説学習指導論の検討

### 第1節 分析批評を用いた小説学習指導の検討

第1項 小西甚一・川崎寿彦の分析批評

第2項 井関義久の提唱する分析批評と批評力とは何か

第3項 向山洋一が目指した分析批評と向山型国語の授業の特徴

第4項 分析批評の限界と課題

### 第2節 文学体験を伴う小説学習指導論の考察

第1項 波多野完治の複合体験としての文学教育

第2項 西郷文芸学の虚構論と共同体験

第3項 田近洵一の文学体験

第4項 難波博孝の文学体験

### 第3節 批評する力の育成と文学体験の関係性

### 第4節 文学作品の読みにおけるメタ認知の機能

第1項 読みにおける理解方略について

第2項 相互交流によって深められる読みの理解方略

### 第5節 メタ認知と批評する力の関係性

## 第5章 批評する力の育成を目指した小説学習指導論の構想

### 第1節 協同的な学びを生かした小説学習指導論の想定

### 第2節 授業における学習者の読みの方略とメタ認知の関係性の考察

－ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」の場合－

第1項 太田正夫の提唱する「十人十色を生かす」読みの交流の意義

第2項 「確かな学力の育成」を目指した広島大学附属中学校一年生の授業の分析

第3項 一人ひとりが話し合いに参加できる授業を目指した笠井正信の授業の分析

第4項 「語り終えた客とわたしの心情」を重視した白石等の授業の分析

### 第3節 批評する力の育成を目指した小説学習指導論の分析

第1項 宮澤賢治「注文の多い料理店」のプロトコルデータの分析

－広島大学附属三原小学校（5年1組）の授業から－

第2項 芥川龍之介「蜘蛛の糸」（高校1年生）のプロトコルデータの分析

－自由の森学園高等学校の斎藤知也の授業から－

第3項 比べ読みによって批評する力の育成を目指した学習指導論の検討

－江國香織「草之丞の話」・椎名誠「ふる場の散髪」・内田百閒「冥途」の比べ読みを例にして－

### 第4節 批評する力を育成する小説学習指導論の検討

第1項 小説の学習指導によって育成される批評する力の解明

第2項 批評する力を育成する小説学習指導論の提案

## 終章 研究の総括と展望

第1節 研究の成果

第2節 研究の展望

参考引用文献一覧

あとがき

## 研究の目的と方法

### 第1節 研究の目的

#### (1) 批評概念の史的検討と批評概念の定義

批評という概念は、1930年代の後半頃のアメリカの教育界で批判的思考という術語として意図的に使用されるようになったことに拠っている。もともとアメリカの社会科教育の中で使用されていたのだが、次第に国語教育にも浸透したとされている<sup>1</sup>。そして、輿水実によって第二次世界大戦後の日本の国語教育にアメリカの国語教育の紹介を通して、批判的思考などの術語が導入された<sup>2</sup>。アメリカの国語教育における批判的思考という術語は輿水の著書によって紹介され<sup>3</sup>、日本の国語教育界に多大な影響を与えたのである。

垣内松三の『国語の力』は理論として、読みの作用を学問的に究明しようと試みたところに生まれた日本の最初の著書である<sup>4</sup>。垣内松三は「読方は、解釈法、又は批評法であり、批評法・解釈法は読方である。」<sup>5</sup>と述べているように、すでにこの時代に「読み方」の中に「批評法」を位置づけている。垣内は読解過程及び作品理解の方法を視野に入れた解釈学を提唱したのだが、多くの論者が指摘しているように観念論の域を出ることができなかつたのである。

垣内松三の解釈学を実践化し、通読・精読・味読・批評という四段階の読みの方法過程に展開したのが石山脩平である。だが、後になって、石山は解釈過程の中から批評段階を取り除き、通読・精読・味読による三段階の解釈学的指導過程を推し進めたのである。石山が解釈過程の中から批評段階を取り除いた解釈学的指導過程を推し進めたのは、決して批評を無意味だと見做したのではなく、批評は「本来解釈ではない」と判断したからであった。

一方、西尾実「批評はあくまで解釈の展開として、またその完成として自ら到達する境地」<sup>6</sup>と考えており、批評は解釈の完成として位置づけられると説いている。石山と西尾の両者において批評の位置づけに差異が見られるものの、石山も西尾も両者ともに戦前から読みにおいて批評することは大切であると認めている。つまり、この時代の国語教育でも批評的に読むことの必要性は意識されていたのである。読むことの教育において、子どもたちの批評する力の育成が大切であると認めていたから、垣内、石山、西尾をはじめとする多くの理論家や授業者によって批評する力を育成するための指導過程や指導法が切り拓かれたのであった。

そこで本研究の第1章では垣内、石山、西尾をはじめ、戦後の東京都教組荒川教研国語部会の「批判読み」、児童言語研究会の「一読総合法」、学習指導要領、さらに教育雑誌『教育科学 国語

1 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』(明治図書、2007年4月、p.166)

2 注1に同じ(pp.149-150)以下、アメリカ教育の中の批判的思考の著書はすべて井上尚美(2007)の著書から引用している。訳についても井上の訳を引用していることをお断りしておく。

3 井上尚美に拠ると、輿水実が導入した批判的思考は、思考スキルの指導を提案した輿水の著書を通して日本の国語教育界に紹介されている。

4 田近洵一『現代国語教育史研究』(富山房インターナショナル、2013年7月、p.27)

5 垣内松三『国語の力』(初出は1922年、不老閣書店。本稿は『国語の力』(1965年10月、有朋堂、pp.5-6から引用している。)

6 西尾実「国語国文の教育」(初出は1929年、古今書院。本稿は『西尾実国語教育全集 第一巻』、教育出版、1974年10月、p.80から引用している。)

教育』に発表された諸論考の史的検討を行いながら、それぞれが目指していた「批評」とは何かを考察し、批評概念の定義を明らかにする。

## (2) 批評する力を育成するための小説教材の検討

新たに改訂された学習指導要領の文言においても、批評する力の育成が求められている。2012年度から施行された中学校学習指導要領の国語科改訂の要点のひとつとして言語活動の充実が挙げられている。また、高等学校においても、共通必修科目に指定された「国語総合」の指導事項に「批評する」ことが指示されている。すなわち、国語教育において「批評する」ことが育成すべき指導事項として重要視されているのである。新たに改訂された学習指導要領には2003年のOECDによるPISA調査の結果が大きく影響しているため、学習指導要領だけではなく、そのことも視野に入れながら史的検討を行っている。史的検討を通して、現今ではどのような批評する力が求められているのかを考察し、批評する力の育成がどのような有用性をもたらすのかを明らかにする。

本研究では、小説の学習を通して批評する力の育成を目指しているため、まず、小説の学習によって育成される批評する力とは何かについて解明を行う。そして、それに基づきながら、第2章と第3章では小説教材の検討を行い、批評する力を育成するためにはどのような指導法が有用であるのかを考察する。国語科教育において文学を学ぶことの意義を述べた山元隆春の見解や、文学の中でも、とりわけ、小説は人生のある断面を描き出したもので、自らの生きる現実の社会世界を見つめる特性をもっているという浜本純逸の見解だけではなく、小説の学習指導の意義を説いた田中実の理論、小説の読みにおける批評概念の定義を述べている丹藤博文の見解を基盤にしながら、小学校と中学校の小説教材の分析(第2章)と、高等学校の小説教材の分析(第3章)を行い、それぞれの教材性の特長を明らかにする。田中実や丹藤博文が指摘しているように、批評する力を育成するためには「語り」や「語り手」に着目した読み方が大切であるのは間違いない。だが、本研究では「語り」や「語り手」だけではなく、「作品構造」・「設定」・「視点」・「空所」及び「否定」・「視座転換」・「伏線」・「象徴」という観点からの小説学習指導法や、文学作品の基本モデル構造、そして、作者の意図を読み取ったり、考えたりすることも大切であるという立場から批評する力を育成するための教材性の検討を行う。

## (3) 小説の学習によって批評する力の育成を目指した指導論の検討

道田泰司はメタ認知によって「自分とは異なる考えを理解でき」たり、「自分自身の考えをより深く理解でき」たりするようになって、批判的思考が深められていくと指摘している。道田の指摘にあるように、小説を読んで、ある事柄や対象に対して批評的な考えや意見<sup>7</sup>を構築する際にはメタ認知が関係していると考えられる。そこで、第4章ではアメリカのニュー・クリティシズムの影響を受けた分析批評、文学作品の読みに伴う文学体験について論じている先行研究の検討を通して、分析批評の限界や課題、批評する力の育成と文学体験の関係性を考察する。そし

<sup>7</sup> 道田泰司「メタ認知の働きで批判的思考が深まる」(『現代のエスプリ』第497号、至文堂、2008年12月、p.65)

道田のいう批判的思考は「自分とは異なる意見を持つ他人を理解するときに役に立つ」ものであるという点において、「批判」と「批評」という表現は異なるものの、本研究の批評する力の概念と隔たりはない。

て、メタ認知と批評する力には関係性があると想定して、文学作品の読みにおけるメタ認知の機能について考察を行っている。第4章で考察したことを踏まえて、第5章ではヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」の読みの指導を中心に行った広島大学附属中学校一年生を対象とした授業、白石等の授業、笠井正信の授業の三例の授業を分析している。この三例の授業の分析結果から学習者の読みが深まっていく思考過程とメタ認知の関係性について検討を行う。また、批評する力の育成を目指した授業として、広島大学附属三原小学校（5年1組）の瀧山真悟の宮澤賢治「注文の多い料理店」の授業と自由の森学園高等学校の斎藤知也の芥川龍之介「蜘蛛の糸」の授業の分析を行っている。批評する力を育成するには、学習者の思考過程において読みを深めなければならない。学習者の思考を深めるためには、そのための指導法が重要になるであろう。したがって、第5章では小説の学習によって批評する力の育成を目指した指導法の検討を行い、批評する力を育成する小説学習指導論の構想について述べている。

本研究は、分析批評に関する先行研究の検討を行った結果、文学体験を重視していなかったところに分析批評の限界が見いだせるという見解を導出している。批評する力を育成するにはメタ認知の機能や文学体験を取り入れた指導が必要なのである。この点を考慮して、第2章と第3章で考察した小説教材の特長を踏まえながら、学習者に批評する力を育成する小説学習指導論を提案している。

以上を踏まえて、本研究では次のような課題を設定した。

- ① 批評する力とは何かを明らかにすること。 (第1章)
- ② 批評する力を育成するために、なぜ小説の学習が有用であるのかを明らかにすること。 (第2章・第3章)
- ③ メタ認知の機能と文学体験の接点を明らかにして、それがなぜ批評する力の育成にとって大切なのかを明らかにすること (第4章)
- ④ なぜ、現今において批評する力が問われているのかを明らかにした上で、批評する力を育成する小説学習指導論を提案すること。 (第5章)

国際社会の中で生きるための能力が求められている現今において、本研究は批評する力の育成を目指している教師の小説学習指導の指標となる役割を果たすだけでなく、小説の学習によって批評する力が育成されることを論究し、国語科教育における小説学習の意義を明確なものにすることを目的とする。

## 第2節 研究の方法

上記の課題を達成するために、本研究では以下の3つの方法を用いる。

### (1) 国語科教育における批評概念の動向の調査と分析

国語科教育では戦前から批評的に読む力の育成が目指されてきたのだが、理論家や授業者によって批評概念が異なっている。その上、批評概念は時勢によっても変遷しているので、理論家、授業者、学習指導要領、PISA調査、国語教育の専門雑誌という様々な観点から分析して、国語科教育における批評概念の動向を調査する。

### (2) 小説教材の特長及び教材性の分析と考察

小説の学習指導を通して、批評する力の育成を図ることを目的としているので、小説の特性を明らかにした上で、それぞれの小説の教材性を分析する。そして、分析した教材性にもとづいて、どのような観点から小説の学習指導を行えば、批評する力が育成されるのかを考察する。

### (3) 批評する力の育成を図った小説の学習指導に関する論考の分析と考察

批評する力の育成を目指した小説の学習がどのように行われているのかを検討するために、批評する力の育成を図った実践報告や論考を分析する。本研究は批評する力を育成するためには、学習者が文学作品を読み深めていき、自分の考えや意見を構築しなければならないと捉えている。読み深めたり、自分の考えや意見を構築したりする際にはメタ認知の機能や様々な方略が影響している。学習者がどのようにメタ認知の機能や方略を活用して読みや考えを深めているのかを調べるために、授業のプロトコルデータを分析して学習者の思考過程を詳細に考察する。

## 第1章 読むことの教育における批評概念の史的検討

荒木繁の論考、西尾実の「問題意識喚起の文学教育」に関する見解、中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」を検討して、子どもたちが「よりよく生きる」には、現実の社会生活に横たわる問題や課題について、自ら解決していこうとする資質や能力、主体的に自らの考えを築き上げていく力が必要であり、現実を「よりよく生きる」ための礎となるのが批評する力であることを導出した。「よりよく生きる」ための力の礎となるのが批評する力であることを明らかにした上で、小説学習によって学習者にどのような批評する力が育成されるのかを、西郷竹彦、浜本純逸、山元隆春の見解を踏まえて、小説には現実を反映する何らかの経験、意味づけた事実や世界が凝縮されているので、小説に描かれている人生の有り様を読み取り、そこから相対的に他者や自己を認識して、他者や自己に対する理解を深めていった力は、現実の社会を「よりよく生きる」ための力になることを指摘した。そして、この点にこそ、小説の学習によって批評する力を育成する意義があることを論述している。

批評する力を育成することの根拠となる国語科教育における批評概念を明らかにするために、垣内松三、石山脩平、西尾実の批評概念、東京都教組荒川教研国語部会の「批判読み」、児童言語研究会の「一読総合法」、学習指導要領、PISA型読解力におけるクリティカル・リーディングの分析、国語教育界を代表する雑誌のひとつである『教育科学国語』を対象として史的検討を行った。

大久保忠利が戦後の国語教育理論としてとりわけ重要な推進力となったもののひとつが「批判読み」精神の浸透であったと指摘している<sup>8</sup>ように、国語科教育では学習者に批判や批評する読みを指導することが推し進められてきた。批判的に読むことの指導は東京都教組荒川教研国語部会や児童言語研究会といった民間側からの提唱であったのだが、現今の批評する読みはPISAが反映していることを指摘している。PISA調査は民間側ではなく、調査参加国政府が協同で実施するという国際的な規模である点が異なっている。PISA調査を受けて、グローバルな立場から社会に参加できる能力の育成が現今では目指されている。グローバルな社会に参加するには主体性や批評する能力が不可欠になる。そして、自分の考えや意見を明確に表現する力も問われている。現今では、批評的に読む力だけではなく、批評的な読みに関する自分の見解を論理的に説明することができる表現力も求められている。本論文第1章で批評概念の史的検討を行った結果、「批評」は価値判断を内包する語であるのだが、「批評する力」という語句には社会へ参加する能力という概念が内包されていることが明らかになった。これから生きる子どもたちに、生きるための確かな力と技能を育てるために、国語科の授業で内容と形式の両面にわたってさまざまなテキストの批評に取り組ませようとしているのである。本論文における批評概念の史的な検討から、そのような「批評」の学習の重要な意義が浮かび上がってきた。

## 第2章 批評する力を育成する小説教材（小学校・中学校）の検討

現今の国語科教育において批評する力の育成が求められていることを明らかにした上で、第2章では、小説の教材研究の見地から、批評する力を育成するためにはどのような読みをすればよいのかを検討した。宮本輝「手紙」（小学校5年生）、宮澤賢治「オツベルと象」（中学1年生）、田口ランディ「クリスマスの仕事」（中学2年生）の教材を学年順に取り上げて、教材性の検討を行った。

<sup>8</sup> 大久保忠利「日本の国語教育の真の前進をめざして」（『教育科学 国語教育』第88号、明治図書、1966年2月、p.36）

小説教材による学習指導の意義については、芦田恵之助、浜本純逸、田中実、丹藤博文の見解を踏まえて明示している。そのなかでも浜本純逸、田中実、丹藤博文は小説を読み深めるには感動がなければならないと捉えている。浜本は文学作品を読む上で読者の感動体験が大切であることを踏まえつつ、「作品の世界を生きることをとおして、現実の自分の生き方が見直されていく」ので、「自分を見直す目とか自分を批評する目を育て」<sup>9</sup>たいと述べている。田中は、感動体験を経て、「既存の主体を瓦解し、〈倒壊〉」されて「新たな読者へと造り変え」られた読みは、「文学作品の〈深層批評〉を可能にしてい」<sup>10</sup>く考えている。丹藤は、「感情と知性の往復運動」によって「深化」するのが感動なので、「その読者なりの〈感動〉があるのであれば、まずはそこに意味を見だ」<sup>11</sup>そうとする指導を目指している。丹藤がそのような指導を目指すのは、学習者の学力のなかで「最も不足しているのが、〈批評〉する力であると認識し、「〈批評〉の力を回復してい」<sup>12</sup>く必要性を認めたからである。浜本、田中、丹藤は文学作品を読んだ読者が感動を覚える文学体験を経た読みによって、読者の読みは深められていき、その読みから、読者が自分自身を見つめ直したり、自分の生き方を批評したりすることを目指している。とりわけ、田中と丹藤は両者ともにそれぞれが目指す読みの指導において「語り」や「語り手」を重視している点が合致している。田中と丹藤は、学習者の批評する力を育成するためには、「語り」や「語り手」を重視した読みの指導が必要であることを言及している。

本研究は、田中と丹藤の見解は傾聴に値するものと考えて、「語り」や「語り手」に着目した読みについて考察している。しかしながら、宮本輝「手紙」（小学校5年生）や宮澤賢治「オズベルと象」（中学1年生）については、学習者の読みの発達段階を考慮して、「視点」・「作品構造」・「空所」・「文学作品の基本モデル構造」といった観点から教材的価値を明らかにした。

### 第3章 批評する力を育成する小説教材（高等学校）の検討

第3章では、村上春樹「青が消える」（高校1年生）、山田詠美「ひよこの眼」（高校1年生）、江戸川乱歩「押し絵と旅する男」（高校2年生もしくは高校3年生）の教材を学年順に取り上げて、教材性の検討を行った。高校生の教材については、小説は「物語＋〈語り手〉の自己表出」<sup>12</sup>であるから、語り手の語る表現に着目しなければならないという田中実の指摘や、批評するためには「小説においては語りを読むことが必須の条件」<sup>13</sup>という丹藤博文の指摘を踏まえながら、それぞれの教材の特徴を押さえて教材的価値を明らかにしている。

特に、江戸川乱歩「押し絵と旅する男」の小説教材については、小説は「物語＋〈語り手〉の自己表出」であるという定式をもとにして読むのではなく、語り手の「信頼」度を左右する作品であるという立場から教材性を検討した。「押し絵と旅する男」は語り手に対する信頼性が読者の読みや作品世界にどのような影響・効果を与えているのかを学ぶことのできる教材であり、学習者に「自己と世界の関係が新たに開かれていく可能性」を秘めていることを論じている。

それぞれの作品の教材性を検討した結果、学習者の批評する力を育成するためには「語り」・

<sup>9</sup> 浜本純逸『文学を学ぶ・文学で学ぶ』（東洋館出版、1996年8月、p.60）

<sup>10</sup> 浜本純逸・田中実・須貝千里「今日の「教育改革」と「読むこと」の新たな可能性」（『「これからの文学教育」のゆくえ』、右文書院、2005年7月、p.51）

<sup>11</sup> 丹藤博文『教室の中の読者たち』（学芸図書、1995年4月、p.138）

<sup>12</sup> 田中実「消えたコーヒーカップ」（『社会文学』第16号、日本社会文学会、2001年12月、p.12）

<sup>13</sup> 丹藤博文「メタ批評としての読み」（『月刊国語教育』第30巻第2号、東京法令出版社、2010年5月、p.24）

「語り手」に着目して読むことが大切であるのは間違いない。しかしながら、「語り」・「語り手」だけではなく、「作品構造」・「設定」・「視点」・「空所」及び「否定」・「視座転換」・「伏線」・「象徴」という観点からの小説学習指導、文学作品の基本モデル構造、作者の意図を読み取ったり、考えたりすることも大切であることを論証している。色々な角度から小説を読めるようになる力を育てることが、学習者の批評する力をさらに高めることができると考えて、「語り」や「語り手」だけに焦点化せず、それぞれの教材の特長を生かした読みの授業を展開することが必要であると論じている。「語り」や「語り手」だけではなく、様々な観点から小説の読みを提出したのは、学習者が色々な角度から小説を読めるようになることで、現実の世界においてもひとつの視点ではなく、あらゆる視点から考えたり批評したりすることを目的としているためである。そうするなかで多様なものの見方を手に入れることができるようにすることが重要である。

#### 第4章 批評する力の育成を目指した従来の小説学習指導論の検討

第4章では、批評する力の育成を目指した従来の小説学習指導論を検討するために、小西甚一、川崎寿彦、井関義久、向山洋一の分析批評の特徴を明らかにした。現在の国語科教育において、多くの教師が向山の分析批評を援用した授業を報告しており、向山の分析批評は国語の指導法として広く行き渡っていることを裏づけている。だが、その一方で、向山の分析批評をはじめ、分析批評に共通する弱点や限界を指摘したのが渋谷孝、西郷竹彦、鶴田清司である。渋谷は分析批評の弱点や限界の理由を「『分析批評』があくまでも作品中の表現を検討する読みであり、作者や時代背景などの追及を自ら放棄しているからには、それ以上を求めることはできないのである。」<sup>14</sup>と指摘している。渋谷に拠ると、「向山氏は『分析を深めた』段階で授業の目的が果たされたと考え、てしまっていて、「『感動』を授業から完全に排除している」<sup>15</sup>ので、「向山氏をはじめ、法則化の方々は、せっかくの『分析批評』の可能性を自ら狭めている」<sup>16</sup>と指摘している。また、鶴田清司は、「『分析批評』という外的な『閉じた前理解』の規準に『はめ込まれ』た形で説明的に行われることが多くなる」ので「『持参された前理解』が変化することはない。」<sup>17</sup>と指摘している。鶴田のいう「持参された前理解」とは、「こどもが日常体験のなかで身につけた認識や感覚や感情」<sup>18</sup>を指しており、「外的で閉じた前理解」の適用に基づくコード化された説明が行われるので子どもたちの読みはほとんど変化することはないのである。これらの各氏が指摘するように、向山の分析批評には課題と限界があることが認められる。しかし、向山の分析批評の指導法からわかるように、誰にでも批評ができるように発問の形に工夫したり、比較的取り組みやすい「視点」や「対比」を中心に文学作品を批評する指導を行ったりした点は評価できることを指摘した。

向山の分析批評の課題と限界は、基本的に作中の人物の気持ちなどは授業の課題にしないので、「同化」あるいは「異化」などの文学体験を伴う読みを度外視したことが起因になっている。本研究は、分析批評の弱点や課題を踏まえ、学習者に批評する力を育成するためには、文学体験を経た読みでなければならないという立場に立つ小説学習指導論を検討した。波多野完治、西郷文芸学の虚構論と共同体験、田近洵一、難波博孝の説く文学体験を分析し、それぞれの文学体験の概

<sup>14</sup> 渋谷孝・菅野朋子『鑑賞指導と分析批評・授業への応用』（明治図書、1994年5月、p.31）

<sup>15</sup> 注14に同じ（p.35）

<sup>16</sup> 注14に同じ（p.37）

<sup>17</sup> 鶴田清司『〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』（学文社、2010年3月、p.194）

<sup>18</sup> 注17に同じ（p.166）

念を明らかにしている。それぞれの文学体験の概念を明らかにした結果、学習者は、いきなり「同化」を体験することなく、「異化」、「対象化」といった文学体験をすることはできないので、学習者が読みの発達段階を考慮して小説学習指導論を想定しなければならないことを言及した。また、山元隆春の調査によって、〈見物人〉のスタンスを獲得するには、その前段階として〈参加者〉スタンスを経なければならないことが明らかになった。〈参加者〉スタンスから〈見物人〉スタンスへと段階を踏まなければ、小説に描かれている人生のあり様を読み取って、そこから相対的に現実の世界を眺めて、現実を「よりよく生きる」ために考えることが困難であることがわかった。

第4章第4節と第5節では、学習者の読みを深めるにはメタ認知が関連しているのではないかと想定して考察を進めた。メタ認知の能力が高まっていくのは、小学校高学年から中学校にかけての段階であると考えられているので、小学校高学年から中学校の時期に、人や環境との社会的な相互作用の中で学習者のメタ認知を育成していくと、「関連づける」「質問する」「イメージを描く」「推測する」「何が大切かを見極める」といった理解のための方略を使えるようになり、そのことによって、循環的に批評する力も育成されることを指摘した。

## 第5章 批評する力の育成を目指した小説学習指導論の構想

第5章では、授業における学習者の読みの方略とメタ認知の関係性を考察するために、ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」の授業を行った広島大学附属中学校一年生を対象とした授業、笠井正信の授業、白石等の授業の分析を行った。この3つの授業はすべて授業の中で交流活動を取り入れているという共通点がある。そこで、この3つの授業を分析するにあたって、太田正夫の提唱した「十人十色を生かす」読みの交流の意義を考察している。太田の「十人十色を生かす」文学教育の方法上の特質は、生徒たちに初読の感想を書かせて、それを教師が分類や編集を行い、その分類・編集してプリントされた感想文を生徒たちに読ませ、さらに感想文の感想を書かせている点である。太田はこのような「自分で読む」と「書くことによって読む」と取り入れた授業を行っていた。太田が二次感想の後でさらに「まとめの話し合い」をするのは、感想の感想についての話し合いを通して、生徒たちの読みを多義的なまま放置して終わることのないように工夫することで読者論の問題点を乗り越えようとしたからである。つまり、太田は「他者との〈対話〉を経ながら、読者一人ひとりの読みを成立」させるにあたって、読者一人ひとりの読みの「差異」に着目したのである。太田の「十人十色を生かす」文学教育の方法を考察して、読者の読みには差異があり、差異のある他者の読みを媒介にして自己の読みが変革されることを指摘した。

この他に、広島大学附属三原小学校5年1組の湊山真悟による宮澤賢治の『注文の多い料理店』の授業のプロトコルデータ、及び、自由の森学園高等学校の斎藤知也による芥川龍之介「蜘蛛の糸」の授業のプロトコルデータを分析して、学習者同士の交流による協同学習と、教師が学習者と交流をしながら読みの理解方略を指導することの大切さを論じている。

本研究は、第5章で広島大学附属三原小学校5年1組の例証や船津啓治の指摘を踏まえて、一つの作品だけではなく複数の作品を読むことで、色々な要素に目を向けて作品を捉えるようになることが、現実の世界においても様々な角度から着眼することのできる力が育成されるという見解に立って、江國香織「草之丞の話」と椎名誠「ふる場の散髪」と内田百閒「冥途」の三作品の比べ読みによる小説学習指導論を想定した。この小説学習指導論の特徴は、江國香織の「草之丞の話」の「僕」の語りを鵜呑みにして、「僕」が語っている草之丞の存在を全面的に信じるという立場の読みと、「僕」の語りを全面的に信じることはできないという二つの立場の読み方を提案したことにある。「僕」の語りを全面的に信用して、存在していると思っていた草之丞が実は存在し

なかったかもしれないという読みも可能であることを指導して、学習者に見えてなかった世界を新しく見えさせるような「思いもかけぬ読みの深まり」を実感したり体験したりすることを目的としている。「思いもかけぬ読みの深まり」によって、学習者が想像しなかった世界を新しく見えさせていくのである。幾通りの読みができることを学習者に理解させることが批評する力の育成に繋がることを指摘している。

第1章から第5章までの考察を通して、大切なところを見極めたり、関連づけたり、想像したり、解釈したりする読みの理解方略を習得するには交流活動が骨子となることが明らかになった。学習者に読みの理解方略を習得させるためには、教師が一方向的に教えるのではなく、学習者同士、あるいは教師と学習者との交流によって、学習者が次第に理解方略を習得するようになるのが望ましいことを指摘している。したがって、色々な角度から小説を読めたり、交流によって他者との差異を見出したり、読みの理解方略を習得したりすることで、学習者の読みが変容されていき、新たな読みが構築されたり、今まで見逃がしていたことに気づいたりすることで、小説を批評する力が育成されて、その批評的な読みが現実の世界に反映されるのである。小学校高学年から中学生にかけては、「参加者スタンス」から「見物人スタンス」へ移行するような読む力の指導を考案する方がよいと思われる。「見物人スタンス」から読めるようになると、学習者は作品を批評する基盤となる相対的な観点から小説を読むことができるようになる。高校生になると「語り」や「語り手」に着目した読み方をして、自己や自分のいる現実世界を見つめ直す読みや、新たな視点から現実の世界を見つめることのできる読みの指導を考案することを言及した。このような視点から読めるようになると、現実の社会生活に横たわる課題や問題を見出すことが可能になり、それらを乗り越えていくために、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく能力、そして、主体的に自らの考えを築き上げていく力が培われていき、「よりよく生きる」ための力が育成されるのである。

このように、これからの社会を「よりよく生きる」ための「批評する力」の育成が図られるという点に小説学習の大きな意義を認めることができたところに本研究の成果がある。小説の学習を通して育成された「批評する力」は、児童生徒がこれからの社会を生きていくための大切な足場になると考える。

## 参考引用文献一覧

### 【著書】

- 芦田恵之助『国語教育易行道』（同土同行社、1935年5月）
- 足立悦男『西郷竹彦 文芸・教育全集』別巻Ⅱ（恒文社、1999年3月）
- 荒木繁『文学教育の理論』（明治図書、1970年9月）
- 井関義久『批評の文法—分析批評と文学教育』（大修館書店、1972年4月）
- 井関義久『国語教育の記号論—「批評の学習」による授業改革—』（明治図書、1984年5月）
- 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』（明治図書、2007年4月）
- 石山脩平『教育的解釈学』（賢文館、1935年）
- 太田正夫『十人十色を生かす文学教育—『ひかりごけ』の授業を中心に—』（三省堂、1996年7月）
- 小原信『シングル・ルームの生き方』（新潮社、1992年3月）
- 垣内松三『国語の力』（不老閣書店、1922年）
- 上谷順三郎『読者論で国語の授業を見直す』（明治図書、1997年3月）
- 栗坪良樹『私を語れ、だが語るな』（本阿弥書店、1989年10月）
- 川崎寿彦『分析批評入門』（至文堂、1967年6月）
- 西郷竹彦『西郷竹彦文芸教育著作集』第20巻（明治図書、1978年）
- 西郷竹彦『西郷竹彦文芸教育全集 第14巻 文芸学講座Ⅰ 視点・形象・構造』（恒文社、1998年3月）
- 西郷竹彦『西郷竹彦文芸・教育全集』第18巻（恒文社、1998年7月）
- 西郷竹彦『宮沢賢治「二相ゆらぎ」の世界』（黎明書房、2009年8月）
- 斎藤和也『教室でひらかれる〈語り〉—文学教育の根拠を求めて—』（教育出版、2009年8月）
- 酒井英行『宮本輝論』（翰林書房、1998年9月）
- 坂口京子『戦後新教育における経験主義国語教育の研究—経験主義教育観の摂取と実践的理解の過程—』（風間書房、2009年2月）
- 佐藤公治『認知心理学からみた読みの世界—対話と協同的学習をめざして—』（北大路出版、1996年10月）
- 児童言語研究会著『読解指導過程』（明治図書、1963年5月）
- 児童言語研究会編『一読総合法入門』（明治図書、1966年9月）
- 篠田浩一郎『物語と小説のことば』（国文社、1983年6月）
- 渋谷孝・菅野朋子『鑑賞指導と分析批評・授業への応用』（明治図書、1994年5月）
- 菅野盾樹『メタファーの記号論』（勁草書房、1985年4月）
- 杉田知之『分析批評の方法論』（明治図書、1988年10月）
- 田近洵一『文学教育の構想—文学のことばと感動体験—』（明治図書、1985年2月）
- 田近洵一『読み手を育てる—読者論から読書行為論へ—』（明治図書、1993年10月）
- 田近洵一『戦後国語教育問題史』（大修館書店、1991年12月）
- 田近洵一『現代国語教育史研究』（富山房インターナショナル、2013年7月）
- 鶴田清司『〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』（学文社、2010年3月）

- 丹藤博文『教室の中の読者たち』(学芸図書、1995年4月)
- 丹藤博文『他者の言葉』(学芸図書、2001年3月)
- 寺田守『読むという行為を推進する力』(溪水社、2012年1月)
- 都教組荒川教研国語部会『批判読み』(明治図書、1963年9月)
- 長崎伸仁『エッセー集 心の景色』(メディア工房ステラ、2009年8月)
- 中村龍一『「語り論」がひらく文学の授業』(ひつじ書房、2012年11月)
- 難波博孝『PISA型読解力にも対応できる文学体験と対話による国語科授業づくり』(明治図書、2007年11月)
- 西尾実『国語国文の教育』(古今書院、1929年)
- 二瓶浩明『宮本輝 宿命のカタルシス』(EDI学術選書、1998年7月)
- 野地潤家『野地潤家著作選集 第11巻 垣内松三研究『「国語の力」を中心に』(明治図書、1998年3月)
- 濱田秀行『クリティカルな思考を育む国語科学習指導』(溪水社、2007年11月)
- 浜本純逸『戦後文学教育方法論史』(明治図書、1978年9月)
- 浜本純逸『文学を学ぶ・文学で学ぶ』(東洋館出版社、1996年8月)
- 浜本純逸『文学教育の歩みと理論』(東洋館出版社、2001年3月)
- 廣野由美子『一人称小説とは何かー異界の「私」の物語ー』(ミネルヴァ書房、2011年8月)
- 府川源一郎『文学すること・教育すること』(東洋館出版社、1995年8月)
- 藤田郁代・関啓子編集『標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学』(医学書院、2009年3月)
- 船津啓治『比べ読みの可能性とその方法』(溪水社、2010年7月)
- 松本修『文学の読みと交流のナラトロジー』(東洋館出版社、2006年7月)
- 松山巖『乱歩と東京ー1920 都市の貌ー』(PARCO出版、1984年12月)
- 向山洋一『「分析批評」で授業を変える』(明治図書、1989年2月)
- 村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(新潮社、1999年1月)
- 村上春樹『村上春樹全作品 1990～2000 ①短篇集I』(講談社、2002年11月)
- 宮川健郎『物語もっと深読み教室』(岩波書店、2013年3月)
- 山元隆春『文学教育基礎論の構築ー読者反応を核としたリテラシー実践に向けてー』(溪水社、2005年4月)
- 吉田新一郎『「読む力」はこうしてつける』(新評論、2010年11月)
- 吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』(新曜社、1994年12月)
- 『PISA 2009年調査 評価の枠組み OECD 生徒の学習者到達度調査』(明石書店、2010年10月)

## 【論文】

- 相沢毅彦「〈見えないもの〉を掘り起こすー山田詠美「海の方の子」における試みー」(『日本文学』第58巻第8号、日本文学協会、2009年8月)
- 赤崎伸一「江國香織の小説の教材化」(『月刊 国語教育』第264号、東京法令、2002年11月)
- 阿部昇「教科内容の体系性・系統性の弱さ」(『教育科学 国語教育』第693号、明治図書、2008年6月)

- 阿部昇「流行語＝授業のどこがどう違うのか 読み研＝物語指導のスタンダード形式」(『教育科学 国語教育』第 751 号、明治図書、2012 年 8 月)
- 天沢退二郎・杉浦静「賢治の森奥深くー『新校本宮澤賢治全集』編集委員に聞くー」(『宮澤賢治』第 13 号、洋々社、1995 年)
- 荒木繁 広末保 益田勝実 古田拓 増淵恒吉 西郷信綱 日向秋子 西尾実 司会「座談会・文学教育をめぐってーその課題と方法ー」(『日本文学』第 2 巻 7 号、日本文学協会、1953 年 9 月)
- 有元秀文「国際水準に合った『批判的読み』のスキル」(『教育科学 国語教育』第 607 号、明治図書、2001 年 6 月)
- 有元秀文「読解とコミュニケーションを融合した「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」授業改革」(『教育科学 国語教育』第 676 号、明治図書、2007 年 1 月)
- 井関義久「批評力」(『教育科学 国語教育』第 724 号、明治図書、2010 年 7 月)
- 池上雄三「オツベルと象ー白象のさびしさー」(『国文学』第 27 巻第 3 号、學燈社、1982 年 2 月)
- 池川敬司「オツベルと象ー強迫観念に支配された哀れな男ー」(『国文学 解釈と鑑賞』第 71 巻第 9 号、至文堂、2006 年 9 月)
- 池長潤「クリスマスの問いかけ」(『世紀』第 427 号、世紀編集室、1985 年 12 月)
- 石川則夫「青が消える」(明治書院『新精選国語総合 指導資料 現代文編』(平成 18 年度版))
- 豆利彦「文学教育の任務と方法」(『文学』第 20 巻第 3 号、岩波書店、1952 年 3 月)
- 井上寿彦「「オツベルと象」小論ーオツベルは死んだかー」(「東海学園女子短期大学国文学科創設三十周年記念論文集」、1998 年 4 月)
- 石森信夫「国語教育問題史」(国語教育講座編集委員会編「国語教育講座」第 5 巻、刀江書院、1951 年 7 月)
- 石森延男「国語教育問題史」(国語教育講座編集委員会編『国語教育講座』第 5 巻、刀江書院、1951 年 7 月)
- 石森延男・輿水実「新しい国語教育の建設ー「学習指導要領国語科編」の解説ー」(『国語教育基本論文集成』第 6 巻、明治図書、1994 年)
- 井田望「内田百閒「冥途」論ー夢幻的空間における生と死の了解ー」(『日本文藝学』第 39 巻、日本文藝学会、2003 年 2 月)
- 井本農一「文学教育の提唱ー国語科における文学教育の目標と方法ー」(『実践国語』第 12 巻第 131 号、実践国語研究所、穂波出版社)
- 井上尚美「文言よりも運用の仕方がカギ」(『教育科学 国語教育』第 693 号、明治図書、2008 年 6 月)
- 井上正敏「読書力の向上は可能か」(『教育科学 国語教育』第 125 号、明治図書、1969 年 3 月)
- 井本農一「文学教育の提唱ー国語科における文学教育の目標と方法ー」(『実践国語』第 12 巻第 131 号、実践国語編集所、1951 年 4 月)
- 今井清人『村上春樹年譜』・『文献総覧』(『村上春樹スタディーズ 05』、若草書房、1999 年 10 月)
- 今泉運平「マスコミ時代と批判精神」(『教育科学 国語教育』第 23 号、明治図書、1960 年 12 月)
- 宇佐美眞「「オツベルと象」ー疎外された労働への諷刺ー」(『解釈』第 49 巻第 1・2 号、解釈学会、2003 年 2 月)
- 牛山恵「宮沢賢治『オツベルと象』研究」(『教材研究論集(中学校国語科研究シリーズ 4)』、教育出版、1983 年 5 月)
- 牛山恵「「オツベルと象」(宮沢賢治)教材史研究」(『研究紀要』第 45 号、教育調査研究所、1992 年 12 月)

- 牛山恵「山田詠美「ひよこの眼」の教材価値」(『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 6』、右文書院、1999年7月)
- 江國香織「物語の復権」(『江國香織とおき作品集』、マガジンハウス、2001年8月)
- 遠藤祐「〈十一月〉の物語—「オツベルと象」は誰に語られたか—」(『学苑』第757号、昭和女子大学、2003年10月)
- 大久保忠利「日本の国語教育の真の前進をめざして」(『教育科学 国語教育』第88号、明治図書、1966年2月)
- 大河内祐子「文章理解における方略とメタ認知」(秋田喜代美・大野雅樹編『文章理解の心理学』、北大路書房、2001年9月)
- 大槻和夫「文学教育の充実・発展をめざして」(『教育科学 国語教育』第357号、明治図書、1986年1月)
- 甲斐睦朗「国民教育としての文学教育を」(『日本文学』第53巻第3号、日本文学協会、2004年3月)
- 風丸良彦「「もどかしさ」という凶器—『ねじまき鳥クロニクル』の「僕」と、村上春樹の現在—」、初出は『群像』、1997年3月、後に『村上春樹スタディーズ04』、若草書房、1999年9月に収録)
- 笠井正信「一人ひとりが話し合いに参加できる授業づくり—「少年の日の思い出」(ヘッセ)の授業(中学一年生)をとおして—」(『学芸国語国文学』、第39号、東京学芸大学国語国文学会、2007年3月)
- 笠井稔雄「読みを創造する楽しさ(「オツベル象」)—“デクノボー”の悲しみを中心にして—」(『月刊国語教育』第9巻第7号、東京法令、1989年10月)
- 門澤功成「田ロランディ「クリスマスの仕事」の注釈的な読み—抽象的なテーマをもつ作品による中学二年生対象の授業報告—」(『早稲田 研究と実践』第50号、早稲田中・高等学校編、2008年12月)
- 門島伸佳「文学作品の謎を解く『批評』の学習」(『教育科学 国語教育』第703号、明治図書、2009年2月)
- 門倉昭治「『オッペルと象』の読み方」(『日本文学』第3巻第12号、未来社、1954年12月)
- 川上弘宜「「比べ読み・重ね読み」で「読解表現力」を付ける」(『教育科学 国語教育』第709号、明治図書、2009年6月)
- 川崎寿彦「分析批評の方法」(『国文学 解釈と鑑賞』第41巻第13号、至文堂、1976年10月)
- 河田孝文「学習の手引きにある“指示”=発問への具体化ヒント」(『教育科学 国語教育』第748号、明治図書、2012年5月)
- 神田由美子「「ひよこの眼」」(『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 6』(右文書院、1999年7月)
- 木藤才蔵「中学校学習指導要領改訂・中間発表の要点 国語科」(『初等教育資料』第101号、1958年9月)
- 金城光「ソース・モニタリングの発達—記憶の出どころを探る能力の生涯発達—」(『現代のエスプリ』第497号、至文堂、2008年12月)
- 蔵原惟人「文学の教育性はどこからくるか」(中島健蔵編『新しい文学教室』、1953年10月)
- 紅野謙介「内田百閒『冥途』—「私をめぐる語り—」(『国文学 解釈と鑑賞』第59巻第4号、至文堂、1994年4月)
- 国分一太郎「「批判読み」と「生活読み」」(『教育科学 国語教育』第14号、明治図書、1960年4月)

- 国分一太郎「国語教育用語のこと」(『教育科学 国語教育』第26号、1961年3月)
- 古神子民夫「「オツベルと象」で何を教えるか 推理的読解による読み深め—白象のさびしい笑いに視点を—」(『教育科学 国語教育』第26巻第9号、明治図書、1984年7月)
- 興水実「熊本県の研究者たちの質問に答える」(『国語教育の近代化』、国語教育の近代化のための会、1972年1月)
- 小西甚一「分析批評の有効性」(『文学』第32巻第6号、岩波書店、1964年6月)
- 小西甚一「分析批評のあらまし—批評の文法—」(『国文学 解釈と鑑賞』第32巻第6号、至文堂、1967年5月)
- 小林俊子「オツベルと象—発表された物語—」(『国文学 解釈と鑑賞』第74巻第6号、至文堂、2009年6月)
- 小山恵美子「学習材としての絵本—「絵を読む」ことから生まれることば体験」(『月刊国語教育研究』第205号、日本国語教育学会、1989年6月)
- 佐藤佐敏「読みの方略が転移する可能性—作品を解釈する仮定スキルが他の読みの場面で活用される条件—」(『国語科教育』第65集、全国大学国語教育学会、2009年3月)
- 佐藤正之「高次脳機能障害と認知症に対する音楽療法」(『神経研究の進歩』第63巻第12号、医学書院、2011年12月)
- 佐藤洋一・岡田智「小説教材における「習得・活用」の授業・評価開発—村上春樹「青が消える」(高校1年・明治書院)を例に—」(『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第13号、2010年2月)
- 佐野正俊「川上弘美「神様」の教材性—教室における読むことの倫理—」(『「読むことの倫理」をめぐって』、右文書院、2003年2月)
- 佐野正俊「文学教育における言語論の問題—〈読むことを読む〉という実践へ—」田中・須貝千里編著『これからの文学教育のゆくえ』、右文書院、2005年7月)
- 佐野正俊「村上春樹「バースディ・ガール」の教材研究のために—〈語り〉が生成する「僕」の物語を読む—」(『〈教室〉の中の村上春樹』、ひつじ書房、2011年8月)
- 三宮真智子「学習におけるメタ認知と機能」(三宮真智子編著『メタ認知—学習力を支える高次認知機能』、北大路書房、2008年10月)
- 篠田一士・小西甚一・佐伯彰一(座談会)「日本文学と分析批評」(『国文学 解釈と鑑賞』第30巻第7号、至文堂、1965年6月)
- 清水健一「『蜚川』の主題について」(『国語教室』第51号、大修館書店、1994年2月)
- 白石等「少年の日の思い出」(ヘルマン・ヘッセ、高橋健二訳)『〈中学校の授業叢書〉②中学校 文学の授業—全国実践事例—』(右文書院、1975年11月)
- 白石範孝「批評力を高める秘策—批評するために必要な三つの力を育てる—」(『教育科学 国語教育』第713号、2009年9月)
- 首藤久義「「自己を読む」とはどういうことか—読みの心理に関する芦田恵之助の洞察—」(『国語実践研究—紀要九号—』、千葉県国語教育実践の会、1985年8月)
- 須貝千里「国語教科書の中の「ポスト・ポストモダン」の声—「文学の読みを見直す」ために「外部」問題の掘り起こしを—」(『月刊 国語教育研究』第457号、日本国語教育学会、2010年5月)
- 須貝千里「語り手」という「学習用語」の登場—定番教材『少年の日の思い出』(ヘルマン・ヘッセ)にて—」(『日本文学』第61巻第8号、日本文学協会、2012年8月)
- 砂沢喜代次「経験学習から系統学習へ」(『現代教育科学』第13号、明治図書、1959年6月)

- 角谷有一「岳物語」(教育出版株式会社編集局編『新国語総合 改訂版 教授資料』現代文編、2006年)
- 角谷有一「中学校新指導要領の全面実施を前に文学教育の可能性を探るー復活教材『トロッコ』を読み直すー」(『日本文学』第60巻第8号、日本文学協会、2011年8月)
- 千國徳隆「村上春樹「鏡」をめぐる冒険」(『国語展望』第96号、尚学図書、1995年6月)
- 高木まさき「「物語批判」の系譜ー批判は何に向けられてきたかー」(『日本文学』第57巻第8号、日本文学協会、2008年8月)
- 高柴慎治「川上弘美「神様」を読む」(『国際関係・比較文化研究』、静岡県立大学国際関係学部、2007年3月)
- 高根沢紀子「「草之丞の話」ー〈つめたいよるに〉風太郎の〈話〉ー」(『現代女性作家読本⑩ 江國香織』、鼎書房、2010年9月)
- 竹内常一「語りの構造のとらえ方をめぐって」(『文学の力×教材の力 中学校編1年』、教育出版、2001年6月)
- 竹腰幸夫「宮澤賢治『オツベルと象』の空間」(『静岡近代文学』第25巻、静岡近代文学研究会、2010年12月)
- 多鹿秀継「メタ認知の働きで記憶が変わる」(『現代のエスプリ』第497号、至文堂、2008年12月)
- 田近洵一「ことばの教育と文学の教育」(『日本文学』第27巻第3号、日本文学協会、1978年3月)
- 田中実「〈本文〉とは何か」(『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 1』、右文書院、1999年2月)
- 田中実「断想ー読むことの倫理ー」(『日本文学』第50巻第8号、日本文学協会、2001年8月)
- 田中実「消えたコーヒーカップ」(『社会文学』第16号、2001年12月)
- 田中実「これからの文学教育はいかにして可能かー『白いぼうし』・『ごんぎつね』・『おにたのぼうし』の〈読み方〉の問題ー」(田中実・須貝千里編著『これからの文学教育のゆくえ』、右文書院、2005年7月)
- 田中実「村上春樹の「神話の再創成」ー「Void=虚空」と日本の「近代小説」ー」(『〈教室〉の中の村上春樹』、ひつじ書房、2011年8月)
- 丹藤博文「批評行為としての〈盲点〉の読み」(『日本文学』第42巻第8号、日本文学協会、1993年8月)
- 丹藤博文「メタ批評としての読み」(『月刊国語教育』第30巻第2号、東京法令、2010年5月)
- 丹藤博文「語ること／語らぬこと」(『国語国文学報』、愛知教育大学国語国文学研究室、2011年3月)
- 千々岩弘一「パネルディスカッション「これからの国語教育の道」の総括」(『月刊 国語教育研究』第438号、日本国語教育学会、2008年10月)
- 鶴田清司「「批評」による思考の活性化と授業の活性化」(『教育科学 国語教育』第686号、明治図書、2007年11月)
- 手崎政男「教師の教材観と導入指導研究」(『教育科学 国語教育』第114号、明治図書、1968年4月)
- 遠野拓「「オツベルと象」論」(『日本児童文学』第22巻第3号、日本児童文学者協会、1976年2月)
- 鳥山榛名「国語教育前進のために何が問題になっているか」(『実践国語』、第13巻第143号、穂波出版、1952年6月)
- 中井孝子「「螢川」覚え書き」(『国語教室』第47号、大修館書店、1992年11月)
- 中井孝子「宮本輝『螢川』論」(『名古屋大学国語国文学』第73号、1993年12月)
- 中野和典「宮本輝『春の夢』論ー「星々の悲しみ』『青が散る』との関係からー」(『国語と教育』第

- 25号、長崎大学国語国文学会、2000年11月)
- 西尾勝彦「響き合う文学教材『山月記』と「ひよこの眼」(『同志社国文学』第64巻、同志社大学国文学会、2006年3月)
- 西田喬「国語科の新しい学習形態」(『現代教育科学』第13号、明治図書、1959年10月)
- 西田良子「「オッペルと象」の再検討—賢治童話の系譜における異質性—」(『日本児童文学』第213号、日本児童文学者協会、1974年5月)
- 沼野充義「村上春樹は世界の「いま」に立ち向かう—『ねじまき鳥クロニクル』を読み解く—」(初出は『文学界』第48巻第7号、1994年7月、後に『村上春樹スタディーズ04』、若草書房、1999年9月に収録)
- 浜多野寛治「文学教育はなぜ必要か」(『教育』第73号、国土社、1957年6月)
- 浜多野完治「「批判」の重視」(「シンポジウム・文学教育の目的はなにか」、文学教育の会編講『講座・文学教育』第1巻、1959年9月)
- 浜上薫「「向山型国語」で批評力を育てる」(『教育科学 国語教育』第686号、明治図書、2007年11月)
- 浜本純逸「国語科小・中・高一慣性の検討」(『現代教育科学』第22巻第1号、明治図書、1979年1月)
- 浜本純逸「対話への文学教育」(『日本文学』第41巻第3号、日本文学協会、1992年3月)
- 浜本純逸「文学教育におけるゆさぶり発問—『ごんぎつね』を中心に—」(『教育科学 国語教育』第419号、明治図書、1989年11月)
- 林正子「宮本輝『螢川』論—小説における舞台・表象・方法としての〈川〉(二)—」(『岐阜大学 教養部研究報告』第29号、1994年1月)
- 伴一孝「向山型一字読解」の授業で子供を伸ばす」(『教育科学 国語教育』第638号、明治図書、2003年11月)
- 飛田多喜雄・望月久貴・森岡健二・輿水実「座談会・新指導要領の言語観・教育観」(『教育科学 国語教育』第118号、明治図書、1968年8月)
- 平井昌夫「文部省編『学習指導要領国語科編』を読んで」(初出は『生活学校』、1948年6月、後に『戦前・戦後生活学校11』、生活学校復刻刊行委員会、1983年に掲載される)
- 平岡敏夫「内田百閒「冥途」」(『高等学校国語II 指導資料』、大修館、1989年)
- 平澤信一「民話形態としての「オッペルと象」」(『賢治研究』第43巻、宮沢賢治研究会、1987年5月)
- 府川源一郎「生徒の感想で〈読む〉「鏡」」(『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 6』、(右文書院、1999年7月)
- 福島裕子「川上弘美「神様」の世界を読む」(『月刊国語教育』第28巻第6号、東京法令、2008年8月)
- 藤森裕治「小説の学習指導の方法」(『新たな時代を拓く 中学校・高等学校国語科教育研究』、学芸図書、2010年12月)
- 藤村宣之「知識の獲得・利用とメタ認知」(三宮真知子編著『メタ認知—学習力を支える高次認知機能』、北大路書房、2008年10月)
- 古田拓「打つ人も打たれる人もともに」(『教育科学 国語教育』第3号、明治図書、1959年5月)
- 益地憲一「主体的な読みと言語活動例」(『教育科学 国語教育』第693号、明治図書、2008年6月)

- 増田三良「読解力の向上は可能か」(『教育科学 国語教育』第 125 号、明治図書、1969 年 3 月)
- 町田守弘「文学作品との「出会い」を求めて—宮本輝「蜷川」の実践を軸に—」(『月刊国語教育研究』第 210 号、日本国語教育学会、1989 年 11 月)
- 町田守弘「新学習指導要領の実践的課題」(『月刊国語教育』第 19 巻第 1 号、東京法令、1999 年 4 月)
- 松田司郎「白象(読者)はほんとうに救われたのだろうか」(『日本児童文学』第 22 巻第 3 号、日本児童文学者協会、1976 年 2 月)
- 松本誠司「村上春樹『青が消える』による学習者の読みの交流」(『国語教育研究』第 49 号、広島大学国語研究会、2008 年 3 月)
- 丸山範高「山田詠美「ひよこの眼」における語りの再構成の可能性—「私」の語りの相対化によって開かれる読者の世界を読む—」(『解釈』第 55 巻第 1・2 号、解釈学会、2009 年 1 月)
- 道田泰司「批判的思考の諸概念—人はそれを何だと考えているか?—」(『琉球大学教育学部紀要』第 59 集、2001 年 9 月)
- 道田泰司「批判的思考概念の多様性と根底イメージ」(『心理学評論』第 46 巻第 4 号、心理学評論刊行会、2003 年)
- 道田泰司「メタ認知の働きで批判的思考が深まる」『現代のエスプリ』第 497 号、至文堂、2008 年 12 月)
- 蓑手重則「基礎的な読解の能力とは」(『教育科学 国語教育』第 33 号、明治図書、1961 年 9 月)
- 蓑手重則「観念的機能主義」(『教育科学 国語教育』第 238 号、明治図書、1977 年 8 月)
- 宮城勉「教材の研究 鏡 村上春樹」(『国語 I 指導資料』、東京書籍、1998 年 4 月)
- 村上呂里「ナショナルをめぐる〈声〉と〈文字〉の相克—文化審答申と益田勝実の文学教育論—」(『日本文学』第 56 巻第 8 号、日本文学協会、2007 年 8 月)
- 村松友次「批判読み」(『教育科学 国語教育』第 63 号、明治図書、1964 年 2 月)
- 村松友次「作品構造論即指導過程か」(『教育科学 国語教育』第 69 号、明治図書、1964 年 8 月)
- 村松友次「「主題」という語を返上しよう」(『教育科学 国語教育』第 78 号、明治図書、1965 年 4 月)
- 村山太郎「〈自分らしさ〉を迫る時代の国語の学習」(『国語教育研究』第 49 号、広島大学国語教育会、2008 年 3 月)
- 向山洋一「分析批評による文学授業の見直し」(『教育科学 国語教育』第 308 号、1982 年 10 月)
- 向山洋一「「分析批評」で国語授業を知的にする」(『教育科学 国語教育』第 548 号、明治図書、1997 年 9 月)
- 望月誼三「文学教材の批判読みについて」(『教育科学 国語教育』第 2 号、明治図書、1959 年 4 月)
- 望月誼三「主体的な読みの力を育てるために」(『教育科学 国語教育』第 33 号、明治図書、1961 年 9 月)
- 望月誼三「サークルにおける研究と実践の“定式がえ”」(『教育科学 国語教育』第 48 号、明治図書、1962 年 12 月)
- 望月善次「「分析批評」の文献解題」(『教育科学 国語教育』第 377 号、明治図書、1987 年 4 月)
- 森島久雄「新国語科の「目標」をめぐる争点」(『教育科学 国語教育』第 21 巻第 7 号、1976 年 6 月)
- 山口徹「内田百閒「冥途」における〈隔たり distance〉」(『弘前大学国語国文学』第 29 巻、弘前大学国語国文学会、2008 年 3 月)
- 山下航正「村上春樹「青が消える」(Losing Blue)—孤独な語り—」(『日本文学』第 57 巻第 10 号、日本文学協会、2008 年 10 月)、山下航正「語りと文学教育—村上春樹「青が消える」の読みをも

- とにしてー」（『日文協国語教育』第39号、2009年11月）
- 山下宏「『オッペルと象』のプロット私見」（『国語教育と作品研究』、笠間書院、1978年12月）
- 山根由美恵「《不在》リストー村上テクストにおける《行方不明》《不在》《欠落》ー」（『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、2008年1月）
- 山元隆春「『オッペルと象』における対話構造の検討ー対話をひらく文学教育のための基礎論ー」（『日本文学』第38巻第7号、日本文学協会、1989年7月）
- 山元隆春「読みの「方略」に関する基礎論の検討」『広島大学学校教育学部紀要、第一部、第16巻、1994年1月）
- 山元隆春「二重の風景と開かれた語りー「少年の日の思い出」を読むー」（『日文協国語教育』、第28号、日本文学協会国語教育部会、1996年11月）
- 山元隆春「文学を学校教育で扱う理由」（『国語教育論叢』第13号、島根大学教育学部国文学会、2003年12月）
- 山元隆春「小説の学習指導」（『朝倉国語教育講座2 読むことへの教育』、朝倉書店、2005年11月）
- 山元隆春「交流理論」は学習者に何をもちたすかー「批評的読み」の基礎としての「審美的読み」ー」（『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部（文化教育開発関連領）』第57号、広島大学大学院教育学研究科、2008年）
- 山元隆春「文学教育の研究」（森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一著『新訂国語科教育学の基礎』、溪水社、2010年4月）
- 山元隆春『「読解力」育成のための足場づくりに関する基礎的研究（平成21年～23年度科学研究費補助金基盤研究（C））成果報告書』（研究課題番号：21530939）
- 吉田裕久「読むことの授業の方向と課題」（『月刊国語教育』第19巻第1号、東京法令、1999年4月）
- 吉田裕久・山元隆春・朝倉孝之・岡本恵子・黒瀬直美・新治功・西原利典・土本勝彦・三根直美  
宮本浩治「確かな学力の育成ー国語基本教材の授業アプローチの方法『少年の日の思い出（ヘルマン・ヘッセ）』の場合ー」（『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』、第37号、2009年3月）
- 和田卓也「「読解表現力」の基本は、正確な作品理解と解釈にあり」（『教育科学 国語教育』第709号、2009年6月）
- 渡辺宏「総合主義の克服」（『教育科学 国語教育』第237号、明治図書、1977年8月）

## 【翻訳書】

- ウエイン・C・ブース『フィクションの修辞学』／米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳（書肆風の薔薇、1991年2月）
- ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』／桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳（藤原書店、1991年10月）
- グレイアム・ハフ『文学批評の視点』／荒川民助・吉村宏一・六田正孝・若山浩訳（松柏社、1976年6月）
- ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』／花輪光・和泉涼一訳（水声社、1985年9月）

- ジョナサン・カラー『文学と文学理論』／折島正司訳（岩波書店、2011年9月）
- J・T・ブルーアー『授業が変わる－認知心理学と教育実践が手を結ぶとき－』／松田文子・森敏昭  
監訳（北大路書房、1997年9月）
- ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』／三好郁朗訳（東京創元社、1999年9月）
- フランツ・K・シュタンツェル『物語の構造』／前田彰一訳（岩波書店、1989年1月）
- デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』／柴田元幸・斎藤兆史訳（白水社、1997年6月）
- テリー・イーグルトン『新版 文学とは何か』／大橋洋一訳（岩波書店、1997年2月）
- ミシェル・フーコー『性の歴史 I 知への意志』／渡辺守章訳（新潮社、1986年9月）
- リチャード・ビーチ『教師のための読者反応理論入門－読むことの学習を活性化するために－』  
／山元隆春訳（溪水社、1998年4月）
- ロバート・スコールズ『テキストの読み方と教え方』／折島正司訳（岩波書店、1978年7  
月）
- ロラン・バルト『物語の構造分析』／花輪光訳（みすず書房、1979年11月）
- W・イーザー『行為としての読書』／轡田収訳（岩波書店、1982年3月）
- 米国学術研究推進会議編著『授業を変える－認知心理学のさらなる挑戦－』／森敏昭・秋田喜代美監  
訳（北大路書房、2002年10月）
- ソ連共産党中央委員会附属マルクス・レーニン主義研究所編『第二次世界大戦史⑤ スタリングラー  
ドの攻防戦』／川内唯彦訳（弘文堂、1964年4月）